



俳優・映画監督 ^{み さ か ち え こ} 三坂知絵子さん

俳優として活動し、演技指導にも携わりながら、故郷・下関を舞台にした映画「ちくわっちゃ！」で初監督に挑戦。映画に込めた思いや、下関とのつながりを伺いました。

このまちだからこそ
生まれる「物語」を世界へ

見る側から演じる側へ

「ここで天狗が現れたら、どんな会話をするだろう」。

山の田地区で育った三坂さんは、小学生の頃、通学路を歩きながら頭の中で物語をつくっていました。学芸会で代官役を演じたときには、代官らしさを研究して、声色や姿勢、足の開き方まで工夫。幼い頃から、どう表現するか、どう見せるかを考えることが大好きだったそうです。

演劇との出会いも小学生の頃。体育館で見たミュージカルに心を奪われ、「見る側ではなく、演じる側になりたい」と、

すぐに図書館で演劇の仕事に就く方法を調べたといいます。

中学卒業後には東京で演劇を学ぼうと、家族

に内緒で上京の準備を進めていました。しかし、計画を知った両親に止められ、家族会議に。高校までは地元で学ぶことを約束しました。

その後も演劇への思いは変わらず、高校では演劇部の部長を務め、週末は下関市民ミュージカルの会で活動。そこで、大学に通いながら演劇を学ぶという道を知り、大学進学を機に上京しました。

「ちくわっちゃ！」誕生

大学時代には俳優として活動。その後、演じるだけでなく、ロケスタッフや方言指導など、さまざまな形で映画制作に携わるうち、「もし自分が下関で撮るなら…」と想像が膨らんでいきます。

また、子どもたちに演技を教える中で「実際の映画づくりを通して演技を学んでほし



▲映画の題材にもなった市村蒲鉾の焼きちくわを手に。



▲穴の向こうが見えるちくわに、「先の見通しが良くなるように」との願いを重ねた。

Linked Instagram インスタグラム

市報×Instagram連動企画
フォロワーの皆さんが投稿した下関
の魅力が伝わる写真をご紹介します♡



♡ Q ⑦ @ntm_gram0818さん



♡ Q ⑦ @shima_tabiさん



♡ Q ⑦ @_manboo_34さん

(上から)火の山、老の山公園、角島大橋

Can You Guess Where This Is ??

Editor's note

編集後記

◆「私のおばあちゃん関門橋を歩いて渡った」、「じいちゃんが金子みすゞ見たことあるって言ってた」、「長府の水族館、遊園地、ボーリング場で遊んだ、スコアが手書きだった」、「東駅の名前の由来は、かつて路面電車の駅があったから」、「下関駅の水槽前で待ち合わせ、掲示版があった」、特集の取材から話が逸れて思い出話。楽しいが締め切りは迫る。(き)



▶8月15～16日に
ドリームシップで
行われた上映会後
のサイン会には長
蛇の列。一人ひと
りと言葉を交わす
三坂さん。



◀「ちくわっちゃん！」
は国内外の映画祭
に出品され、数々
の賞を受賞。写真
はカンヌ国際映画
祭2025で一枚。



▶中高生の頃から、海峡ゆめ広場で芝居の練習をしたり、シーモールでパフォーマンスをしたりと、下関で演劇に打ち込んだ三坂さん。写真は高校2年生の夏、下関市民会館で上演された「マムの青空マーケット」(作・演出 伊藤寿真男)で少年役を演じた時のもの。

映画の先にある景色

「見慣れた道や景色も、映画を通して見ると違って見える」と三坂さん。映画が、身

い」と考え、子どもたちを中心にした短編映画の制作を決意。これが、初監督作品「ちくわっちゃん！」の始まりでした。ロケ地探しでは、吉見地区や蓋井島へ。撮影では、エキストラとしての出演や、食事や休憩をする場所を提案してもらうなど、地域の協力に支えられました。「関わった人たちが、参加して良かった、面白かったと誇りに思える作品にしたい」。そんな思いを胸に、映画をつくり上げました。

近な下関の魅力を再発見し、「あそこに行ってみよう」とまちに目を向けたり、「自分も何かやってみよう」と一歩を踏み出したりするきっかけになればと願っています。

三坂さんが初めて監督に挑戦したのは40代後半。「何歳になっても新しいことに挑戦したい。年齢や性別に関係なく、誰かの『やってみたい』に『いいね!』と言えるまちって、素敵だなと思います」

小学生の頃、「見る側ではなく、演じる側になりたい」と一歩を踏み出した三坂さん。その思いは今、一本の映画を通して、誰かの新しい一歩につながると思っています。